

My Diary

[Home](#)[Album](#)[RSS](#)

数字から読む戦争

07 23 *2015 | 未分類

この国の政治状況に、腹の虫が治まらない。前のブログに安倍という人物の特異性に触れて、内田樹と白井総の対談本から彼らの絶妙な見解を引用してみた。なにかに憑りつかれたリーダーに憑りついてしまう愚を繰り返したくないと思ったからだ。

今回は、ある意味で味もそっけもない「数字」から、戦争を考えてみたい。現在の世界各国の軍事費(206兆円)だが、もちろんアメリカが断然トップで76兆円、世界全体の40%近くを占めている。2位が中国で16兆円、3位がロシアで約9兆円。4位から6位までが肩を並べていて、イギリス5.9兆円、日本5.8兆円、フランスが5.8兆円である。続いて、サウジアラビア5.5兆円、インド4.5兆円、ドイツ4.5兆円、イタリア3.3兆円で、さらに以下ブラジル、韓国、オーストラリアの順に続く。

アメリカは、5人に1人がなんらかのかたちで軍事関連の仕事に携わっているという。つまり、世界のどこかで戦争をし続けていないと、国の経済が立ち行かない国家なのである。なんとも恐ろしい国ではないか。そのアメリカに、日本は年間7,000億円の「おもいやり予算」を拠出している。10年で7兆円だ。歴代政府は対GDP比で日本の軍事費(防衛費)は少ないと詭弁を弄してきたが、世界第3位のGDPに比較して、ということに過ぎない。これを見ると、日本がとんでもない軍事大国であることがわかる。アメリカに守ってもらわないと国を守れないというが、それなら軍事費をゼロにしたらどうだ。

イージス艦の保有数も、日本は世界2番目で、アメリカから6隻を買わされている(日本が買われたイージス艦にはトマホークミサイルは搭載されていない、らしい)。1隻1,500億円だから、合わせて9,000億円にのぼる。今後は、国家機密保護法を盾に、政府の独断で、閣議を通さず防衛予算を勝手にふくらませ、イージス艦だけでなく、ミサイルもアメリカから大量に買われ続けることになるだろう。憲法9条の非戦の誓いなんて、もうどこ吹く風なのだ。

突然、話は飛ぶが、もうひとつの「数字」、第二次世界大戦の死者数にふれてみたい。軍人と民間に分かれるが、トップはソ連(現:ロシア)の2,000万(軍1,500万/民500万)人。2位が中国で930万(軍130万/民800万)人、3位ポーランド540万(軍40万/民500万)人、4位がドイツで530万(軍280万/民250万)人、5位が日本で290万(軍210万/民80万)人、6位インド200万(民200万)人、7位ルーマニア80万(軍20万/民60万)人、8位イタリア61万(軍43万/民18万)人、9位と10位は同数で、フランス60万(軍20万/民40万)人、ハンガリー60万(軍0.8万/民60万)人となっている。

ちなみにアメリカは、40万人の死者だが、ほとんど軍人で、民間人の死者は数十人である。ヨーロッパ(対ドイツ)とアジア(対日本)と、二股かけての数字だ。

この数字を眺めていると、ヨーロッパとアジアでなにが起こっていたかが見えてくる。では、ここからなにを読み解くかだが、いまは深入りはやめよう。

ひとつだけ言っておくと、よく話題になるのが中国人の死者数である。両国政府の言い分には幅がありすぎて実数は藪の中だ。一説には、2,000万人を超えるというデータもある。しかし、と思う。現在の中国共産党指導部の困った行状はともかく、中国の民衆にとって日本の侵略戦争とはなんであったか、この数字から想像してみしてほしい。なんの挑発をしたわけでもないのに、勝手に自国に攻め込んできて、1,000万の同胞を殺しまくられた歴史を...

INFORMATION

日々の生活を気ままにつづった日記帳。

[RSS](#)[login](#)[Home](#)

CALENDAR

07 2017.8 09						
S	M	T	W	T	F	S
-	-	1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31	-	-
-	-	-	-	-	-	-

CATEGORIES

RECENT ENTRIES

- 全メール喪失事件
2016.06.18 18:06
[虐待の深層をめぐって④](#)
- 2016.04.05 19:56
[虐待の深層をめぐって③](#)
- 2016.04.02 12:40
[虐待の深層をめぐって②](#)
- 2016.04.01 13:19
[虐待の深層をめぐって①](#)
- 2016.03.30 12:38

RECENT COMMENTS

RECENT TRACKBACKS

いやもっと広く、アジアの民衆のなかにある、あの日本という国は一度ナショナリズムが高揚するとなにをやらかすかわからん、という根深い不信感はその簡単にはぬぐえまい。それこそ、DNAに深く刷り込まれていることだろう。

もし日本が1年早く降伏していたら、日本人300万の死者の3分の2は死なずに済んだということも、ここに記しておくべきだろう。走り出したらだれにも止められないという日本人の悪しき習性を、われわれは乗り越えたと言えるのか。

アジアの国々の死者数も書いておく。インドネシア400万人、ベトナム200万人、フィリピン111万人、韓国+北朝鮮20万人、ミャンマー15万人、シンガポール+マレーシア10万人である。日本が侵略戦争に突入していなかったら、死なずに済んだかもしれない人たちである。

ちなみに、ベトナム戦争の死者数にも触れておく。アメリカ軍4.5万人、サイゴン政府側17万人、革命側85万人、第三国(韓国軍が多い)5,000人である。

70年目の8月がやってくる。この数字を掲げ、鎮魂の夏としたい。

※1日たって、いくつか重大なミスが見つかったので、自らに課した禁を犯して一部の文章に修正を加えました。

16:09

再現される神話

07 21 *2015 | 未分類

ブログを読んでいただいているみなさん、長いごぶさたでした。

この数週間、ブログを読んでるよ、おもしろいね、とたくさんの方から声をかけていただきました。恐縮です。最近、更新されてないけど、なにかあったんですか、とまで。なかには、内容が難しいとか、結局、何を言いたいんだかわからんとか...、貴重なご意見をありがとうございます。

一体、前回のブログを書いた後、オレはなにしてたんだっけと振り返ってみると、結構、多忙を極めていたことがわかりました。備忘のため、ふりかえっておきます。飲み会、懇親会の類は省きますが、まあ、ほぼ毎日、どこかでだれかと親交を深めておりました。

9日、大阪に移動。

10日、大阪で鳥海房枝セミナー主催。

11日、矢嶋先生の葬儀参列(長野県上田市)。

※上田の駅でレンタカーを借り(よりあいの下村恵美子、七七舎の川上京さんと一緒)、武石村に近づくと渋滞が...。斎場にはおびただしい参会者の列、列、列...。矢嶋先生の人望の厚さと各層への影響力の大きさを思い知りました。

12日、雲母書房主催の三好春樹・村瀬孝生セミナーを受講(東京)。

13日、大宮・諏訪の苑での高口光子セミナー主催。

15日、春日部市で三好春樹セミナー主催。

16日、名古屋に移動(台風)。

※とくに、三重県からの参加者の方から、明日、セミナーは開催されるのかというお問い合わせを複数いただきました。ご心配をおかけしましたが、無事に開催、終了することができました。

17日、名古屋で鳥海房枝セミナー主催。終了後、福山に移動。

18日、福山で清藤大輔セミナー主催。終了後、博多に移動。

19日、福岡で清藤大輔セミナー主催。

ARCHIVES

[2016.06\(1\)](#) [2016.04\(3\)](#) [2016.03\(4\)](#)

[2016.02\(1\)](#) [2015.09\(4\)](#) [2015.08\(6\)](#)

[2015.07\(4\)](#) [2015.06\(9\)](#) [2015.05\(3\)](#)

SEARCH

20日、特別養護老人ホーム「よりあいの森」視察(福岡市)。帰京。

※施設長の村瀬孝生さんが出迎えてくれ、案内してもらいました。オープンしてまだ3カ月なのに、そんなふうに見えないのは、よりあいのケアがブレないからでしょう。広い1階のリビングに集まっているお年寄りたちは落ち着いていて、宅老所にいるのとまったく変わらない雰囲気。とても居心地がよく、楽しい時間を過ごさせていただきました。

とまあ、いろいろありましたが、この間の特筆すべきは、戦争法案が衆議院を通過したこと。どこに行っても誰と会っても、この話題でもちきりでした。まあ、梅雨が明けて、頭も体もふにやふにやになっただけのこと書いておくべきか...

それにしても、半数以上の国民が憲法違反だと言っている。論理性も正当性もない法案に対して、国民の理解が行き届いていないって、当たり前ではないか。安倍は、国民は頭が悪くて理解力が劣っていると聞いたげだが、少なくともアメリカに尻尾を振るだけで、国民の声に耳を傾ける気がまったくない首相なんかより、過半の国民は本気でこの国の将来を案じているんだよ。

どうして、安倍のような解離的な人格ができあがったのか、内田樹と白井聡の対談『日本戦後史論』(徳間書店)を読んでかなり納得できた。この国のリーダーの人格をあげつらっても、なにも片付かないことは承知している。しかし、彼の言明を「すっきりしている」とか「スマートなプレーヤーだ」と思ってしまうわれわれの受けとめ方を、自省するヒントにはなると思う。

まずは、内田樹の分析を紹介する。

『でも、あの人の話にはまったくノイズがないでしょう。「村山談話を見直します」「見直しません」といきなり右から左へ極端に変わる。その間の葛藤がない。葛藤がないのは、どちらの言明も腹の底から出てきた言葉ではないからですね。「村山談話を見直す」と言った政治的人格も、「見直さない」と言った政治的人格も、どちらも彼にとっては借り物なんです。あるペルソナが言った言葉を別のペルソナが否定する。どちらにしても生身の安倍晋三とは関係がない』

『伝統的な「対米従属を通じての対米自立」戦略はもうちょっと込み入った構築物だったんです。ところが安倍さんでは対米従属と対米自立が交互に出てくる。普天間基地の問題で沖縄県知事の譲歩を取り付けた直後に靖国参拝をする。集団的自衛権の容認を閣議決定した直後に北朝鮮への経済制裁を解除する。つまり「対米従属」のポーズを一つすると、その後に「アメリカが嫌がること」を一つする。彼の中ではそれで帳尻が合っているんだと思います。

(中略)

...安倍さんは違う。「対米従属」と「アメリカが嫌がることをする権利」がバーター交換されている。問題は、従属の代償として受け取るのは「アメリカが嫌がることをする権利」であって、日本の国益ではないということです』

安倍という人が、祖父の岸伸介と自分の運命をダブらせていることはさんざん指摘されてきたことだが、ぼくは彼の幼児性と、パラノイア的な独裁者気取りについてもずっと気になっていた。続けて、白井聡の話で印象に残ったところも引いておく。白井は『永続敗戦論』(太田出版)でデビューしたまだ30代の論客である。

『最も可能性が高いのは中東だと思いますが、自衛隊員から犠牲者が出ることになる。その棺に日章旗が被せられて羽田に帰ってくる。そこで首相として沈痛な面持ちでスピーチしてみたい。厳粛そのものという雰囲気の中で。このシーンは、たしかに政治家のキャリアのハイライトになるでしょう。戦後日本の政治家の誰も経験することのなかったシーンですから。彼らは、中国の台頭だの、アメリカの覇権の揺らぎだの、テロとの闘いの必要性だの、大国の責任だのともしもらしいことを言いますが、ほんとうにやりたいのはこれでしょう』

心理学者のユングは、ヒトラーとドイツ民族のあの熱狂は、ゲルマン民族の神話に出てくる闘いの神・ヴォータンのイメージに自分たちを一体化したものと指摘している。安倍という個人の私的幻想に、一億数千万人の運命を委ねてよいのか。いま、われわれ日本人がその正念場に立たされていることだけは間違いない。

18:17

矢嶋先生のこと

07 06 *2015 | 未分類

昨日、5日の朝、矢嶋嶺先生が亡くなられた。82歳だった。上田市のライフケア信州の中井孝幸さんから第一報を受け、とくに矢嶋先生と親しかった方々に配信した。

先生は医者としてだけでなく、人として心から尊敬できる稀有な存在だった。その人生哲学は、多くの人に影響を与えてきた。地域医療の先進県、長野で、血の通ったあたたかな医療活動を生涯貫かれた。

雲母書房時代、先生の著書を2冊、共著を1冊出版させていただいたのをご縁に、15年以上にわたってお付き合いをいただき、公私ともにたいへんお世話になった人である。

矢嶋先生と最後にお会いしたのは昨年の10日4日、甲府のおむつ外し学会の会場だった。奇しくも、昨日はその学会を主催したごく楽介護の会に招かれて、講演に行く日であった。会場も同じ山梨県立図書館。なんという因縁だろうと驚きながら、見えない力に引き寄せられるように、甲府に向かった。

少し早く着いたので、あの日、先生がおられた会議室をのぞいてみた。その会議室の前のほうで、高口光子さんと話し込んでいる姿が、鮮明に思い出された。

講演が始まる前、聞き手のみなさんに向かい合ったとき、不意にある記憶がよみがえってきた。

もう6~7年前だろうか、福岡の宅老所よりあい主催のセミナーで、ぼくはパネルディスカッションの司会を任された。パネラーは先生のほか、三好春樹、下村恵美子、村瀬孝生の各氏。会場には500人を超える人たちが集まっていた。こんな聴衆を前にしたのは初めてなので、ぼくはかなり緊張していた。それを先生に話すと、ニコッと笑い、小声でこんなことを言われた。「まだ時間があるから、コンビニに行ってウイスキーの小瓶を買って、一杯ひっかけてきなさい」と。実際に酒を飲むことはなかったが、飲んだつもりになったら少し気持ちが落ち着いた。

心配はすべて杞憂に終わった。4人ともおしゃべりだし、司会者そっちのけでパネラー同士、マイクをリレーして話を盛り上げてくれた。それに聞き入っているうちに時間がきたので話を途中で切り上げるしかなく、短くまとめたのだったが、なんのことはないタイムキーパーをやっただけだった。

昨日も話し始める前、少し緊張していたので、ウイスキーを飲んだつもりになってみたけど、もう効き目はなかったです、先生。

どうも調子が出ないので、先生に語りかける形で続きを書いていく。仏教では、魂がからだを離れるまで49日かかると言われている。その間になにが起こるかは、『チベットの死者の書』に詳しく書かれている。いま、先生はこの世で見たこともないまばゆい光を浴びて、少しびっくりされているのだろうか。

先生、これはよく覚えているのですが、15年前の10月、ぼくはネパールから関西空港に帰国し、そのまま先生と三好春樹さんのジョイントセミナーに合流したことがあります。関空についた直後から、ぼくは激しい下痢に見舞われました。確か奈良と大阪、あと1箇所を回るツアーだったと思います。不安になって先生に診察してもらおうと、「日本にはいないタチの悪い細菌にやられたんだな。3~4日すると収まるから大丈夫」と言われました。「万が一、1週間たっても収まらなかつたら私の診療所に一泊するつもりで来なさい。1日点滴をすれば必ず治るから」とも...。なんだか、主治医にずっと付いてもらっているようで、とても心強かったです。

そう、先生は病気について、いま起こっている事態はなにか、これからどういう推移をたどるかを、いつもていねいに説明してくれましたね。先生のお見立て通り、5日ほどで下痢はすっかり収まりました。先生は、名医です。

それから、ぼくは調子に乗って、その後、何年にもわたって、先生に両親の病気のこと、自分の健康のことなど、ずっと相談に乗ってもらってきました。あのときから、ぼくは先生を勝手

に主治医に仕立て上げていたのです。ずいぶん、ご迷惑だったでしょうね。でも先生はいつも、じっくりと相談にのってくれ、有益なご指摘をたくさんいただきました。

ぼくは、午前中は診察があってお忙しいだろうと思って、だいたい午後には電話を入れていました。先生に余裕があるときは、病気の話だけでなく、ついでにいろんな話をしてくれました。たとえば「TPPIについてどう思いますか？」と聞かれ、いまの政府批判に話が及んだり...。先生は老左翼としての誇りと一貫した信念をお持ちでした。社会的な不正義にいつも憤っておられた。

2年くらい前だったでしょうか、ぼくが電話をすると元気がない声が聞こえてきました。「昼寝をしていたんですよ。最近、昼寝をしないと体がもたなくなりましてね」とおっしゃいました。ああ、先生も老いられたんだなと思いました。それからは、極力、電話を自粛するようにしたのです。

介護保険が始まる前だから、ずいぶん昔の話です。ぼくは矢嶋先生の手稿がほしくて、飯田で開かれていた先生の講演会にお話を録音するためうかがったことがありました。終了後、先生の手で岡谷まで送っていただいたのでした。奥様もご一緒でしたね。長野オリンピックの批判本を出版した直後だったと思います。先生は、書店でその本を購入され読まれている、とてもよい本だとほめていただきました。こんな売れそうもない本をよくつくりましたね。でも、だれかがこういう仕事をきちんとやらなければならない、と。それから、ずっと車中で出版談義をしましたが、先生の読書量の多さにとても驚かされた記憶があります。

いや、いちばん楽しかったのは、やっぱりお酒の席での数々の思い出です。政治や経済、文学や芸術、先生の話は豊富でした。なかでもクラシック音楽の話になると、もう少年のように上気して、夢中でレクチャーされましたね。先生から薫陶を受け、ベートーヴェンのピアノソナタやピアノ協奏曲に少しだけ開眼させていただきました。先生お勧めのピアノソナタの最後の3曲はいいですね。ベートーヴェンの枯淡の境地...

こんなこと書いていいのかわかりませんが、先生は、色っぽい話も大好きでしたね。先生のようにそういう話題を上品にされる人ってそれまで会ったことがありません。女性がそこにいても、不快にならないばかりか、一緒に楽しめるというのは、とても難しい技です。ある日、先生にお会いしたら、「いや、午前中、乳がん検診で、200個のおっぱいを触ってきました。いささか疲れました」とおっしゃいました。ぼくは、じゃあ今度、ぼくを助手として手伝わせてくださいとお願いしたりして...、いやお恥ずかしい話です。

1年ほど前でしたか、先生と電話で話していたとき、「今度、茂木さんと死生観についてゆっくり話し合ってみたいと思っています。とくにインドの考え方を知りたい。近々、一席設けますから、上田に来られませんか？」とお誘いを受けました。じゃあ、いつか機会をみて...とぼくは答えたいと思います。あわてて、少し勉強しなければと思ったのです。ところが、そんな決心なんてすぐに忘れて、今日までずっと勉強を怠り続けてきました。

でもね、先生、「いつか」なんて時間は、永遠にこないんですね。いま思い立ったら、いま行動に移すことも大切なんだと、身に染みて思います。あのとき、思い切って行ってあげばよかった。せつかく先生と差しでお話しできる機会だったのにと、いまは悔やまれてなりません。

一気呵成にここまで書いてきました。なんだか思いがあふれ出して、書くことで気持ちを鎮めたかったのです。

先生がいなくなって、とてつもなく寂しいです。どうか、ゆっくりお休みください。

16:36

未来は嫌い、過去が好き

06 29 *2015 | 未分類

生きているといろんなことに巻き込まれるもので、ほんとうに久しぶりに落ち着いてパソコンの前に座っている。この間、仕事を兼ねてとはいえ、梅雨のない札幌に数日滞在したり、先

週は仙台に行ったりと、飛び回っておりました。日本各地にいる古い友人に会って飲むのが楽しみ...と、これもまた老年症候群ですね。

介護職のみなさん、こんにちは。

年をとると記憶のシステムが年代記から遠近法に変わり、最後は一枚の絵になるという話、いかがでしたか。ちょっとだけ認知症の人の内面世界を理解する手掛かりになったでしょうか。今日は「ですます」調で書きます。

また話が飛びますが、この間、気になってたことは、どうして年をとるとみなさん時代小説や歴史小説に夢中になるのかという案件でした。歴女の話はひとまずおきますけど、ぼくより年上の人たち(おもに70代)と話す、実にその話題が多い。で、そのものズバリ、関川夏央の『おじさんはなぜ時代小説が好きか』(集英社文庫)を再読してみました。

この本は、若い人向けに書かれた本で、「おじさん」(関川)たちが生きた昭和という時代に、司馬遼太郎や藤沢周平の作品がなぜアクチュアルだったかについて読み解いた作家論であり、大衆文化論でもあります。おもしろいから読んでみてください。

そこで、こんな文章に出会いました。以前に読んだときは、まったくひっかからなかったところです。

「人間の想像力はどちらかというと未来を拒絶するようにできています」

そのとおりですね。20代のとき、中年になった自分のことなんて考えなかったし、考えたくもなかった。中年になると、今度は老人になった自分や認知症になった自分、さらにその先に確実にある死のことなんて、リアルに考えませんでした。いや考えてはいたけど、抽象的なものでした。

20代のころは、「Don't trust over thirty.」(30歳以上のやつの言うことなんか信じるな)というフレーズを好んで使っていました。これは60年代のヒッピームーブメントの時代、反ベトナム戦争の活動をしていたジェリー・ルービンという人が使った言葉だそうですけど。

反対に、人間って過去が大好きなんです。だから、時代小説や歴史小説がこんなに読まれるんだと、ずっとそう考えていました。書店に行くときわかりますが、売れ筋はその手の本ばかりです。過去って、ほんとうは1ミリも動かすことのできない、累々たる死の世界、死者たちの世界なのに、そこにロマンを感じる。そこから汲めども尽きぬ物語を立ち上げようとする。不思議です。

そしたら、つい先日読んだ池田晶子の『人生は愉快だ』(毎日新聞社)にこんなことが書かれていました。

「年をとると、みな歴史の本を読むようになりますが、なぜ歴史に帰るのか。年を重ねると自分の歴史と人類の歴史とが重なってくるからです。人間はこんなふうに地上に生まれ、ここまでやってきたということが、まるで自分のことのように感じられる。(中略)自分の過去だけでなく人類の歴史や宇宙の存在にまで視野が広がっていく。そういうものへの味わいが深くなっていく。年をとることは、ある意味で個人を捨てていくことと思う」

死が避けようもなく近未来に迫っているのを感じながら、自分という輪郭がぼやけてきて、大いなるいのちの流れのなかに自分というものが溶け込んでいく感じ。あんなに執着していた「自分」って、そんなに確固とした実体のあるものではなかった。それに気づくんですね。だとしたら、年をとるのは悪くない。

このブログを拡散してくれている三好春樹さんが、先日の関係障害論の講義で、アブラハム・マズローの欲求の階層論にふれて、マズローがもっとも高い到達点として措定した自己実現って、そんなに大事なもののかと疑問を呈していました。そこで、「自己」のつく四字熟語を探してみると、自己嫌悪や自己矛盾や自己満足や自己喪失や自己憐憫、われわれの世代が愛好した自己批判や自己否定、ネガティブなものばかりぞろぞろ出てきます。自己って、いかに不安定で危ういものか、よくわかります。

ユングに言わせれば、自分とはまずペルソナ(仮面)です。自分がこうありたいと思う自分、社会がこうあるべきだと推奨する自己像を「仮面」として装着するんですね。いつしか、それを自分だと思いつく。そのためには、その自己イメージに合わない自分は抑圧せざるを得ない。結果、本来の自分を存在しないものとして無意識の領域に閉じ込めてしまう。しかし、単に押しつけているだけなので、その自分は常にそこからの脱出を企てているわけです。つまり、これが自分だと思いつく自分とは本来の自分ではなく借りものですから、もともと

の成り立ちから不安定なんですね。

年をとるとそういう仮象が自分から剥離して行って、無意識の領域に押し込まれていた本来の自分が立ち現われてくる。すると、他者や世界や大自然と画然と隔てられた唯一絶対な自分などというものはないことがわかってきます。「孤」として隔離したはずの自分と世界との間には、もともと境界は存在しなかったのです。

かくして、閉ざされた自己、つまり「私」は、「私たち」→「人類」→「宇宙」という無限の拡がりのなかに躍り出していくのでしょうか。

17:49

むずかしいことをやさしく

06 18 *2015 | 未分類

前回のブログの最後に、長田弘の「あのときかもしれない」という詩を引いた。これは1から9までのブロックで区切られた長篇詩のダイジェスト版である。

ほんとうは『深呼吸の必要』(晶文社)という詩集の、半分を占める長い長い詩なのだが、入力するのはたいへんなので、ネットで探したらこの短縮詩が見つかったのでそのまま引いてしまった(それにしても、途中の抜き方が見事なんだけど...)。したがって、「...」で始まる箇所は、その間に大量にカットされた詩がはさまっているとお考えください。そして、ぜひ原詩をひもといてください。

ブログをUPしてからずっと気になっていたので、事情をここに記して敬愛する故人にお詫びしたいと思います。長田さんは、この5月3日、胆管がんのため亡くなられたばかりです。享年75歳でした。今年の4月に、半世紀に及ぶ詩業をまとめた「長田弘全詩集」(みすず書房)を出したばかりでした。長田さんは、わかりやすくやさしいことばで物事の本質を鷲掴みする達人でした。

ぼくの好きな長田さんの詩(「あのとき～」が一番好きなんだけど)を2篇掲げ、追悼といたします。ぜひみなさんも味わってください。

「最初の質問」

今日、あなたは空を見上げましたか。空は遠かったですか、近かったですか。雲はどんなかたちをしていましたか。風はどんな匂いがしましたか。あなたにとって、いい一日とはどんな一日ですか。「ありがとう」という言葉を、今日、あなたは口にしましたか。

窓の向こう、道の向こうに、何が見えますか。雨の雫をいっぱい溜めたクモの巣を見たことがありますか。榎の木の下で、あるいは榊の木の下で、立ちどまったことがありますか。街路樹の木の名を知っていますか。樹木を友人だと考えたことがありますか。

このまえ、川を見つめたのはいつでしたか。砂のうえに坐ったのは、草のうえに坐ったのはいつでしたか。「うつくしい」と、あなたがためらわず言えるものは何ですか。好きな花を七つ、あげられますか。あなたにとって「わたしたち」というのは、誰ですか。

夜明け前に啼きかわす鳥の声を聴いたことがありますか。ゆっくりと暮れてゆく西の空に祈ったことがありますか。何歳のときのじぶんが好きですか。上手に歳をとることができるとおもいますか。世界という言葉で、まずおもいえがく風景はどんな風景ですか。

いまあなたがいる場所で、耳を澄ますと、何が聴こえますか。沈黙はどんな音がしますか。じっと目をつぶる。すると、何が見えてきますか。問いと答えと、いまあなたにとって必要なのはどっちですか。これだけはしないと、心に決めていることがありますか。

いちばんしたいことは何ですか。人生の材料は何だとおもいますか。あなたにとって、あるいはあなたの知らない人びと、あなたを知らない人びとにとって、幸福って何だとおもいますか。時代は言葉をないがしろにしている――あなたは言葉を信じていますか。

「世界はうつくしいと」

うつくしいものの話をしよう。
いつからだろう。ふと気がつくと、
うつくしいということ、ためらわず
口にするのを誰もしなくなった。
そうしてわたしたちの会話は貧しくなった。
うつくしいものをうつくしいと言おう。
風の匂いはうつくしいと。溪谷の
石を伝わってゆく流れはうつくしいと。
午後の草に落ちている雲の影はうつくしいと。
遠くの低い山並みの静けさはうつくしいと。
きらめく川辺の光りはうつくしいと。
おおきな樹のある街の通りはうつくしいと。
行き交いの、なにげない挨拶はうつくしいと。
花々があって、奥行きのある路地はうつくしいと。
雨の日の、家々の屋根の色はうつくしいと。
太い枝を空いっぱいひろげる
晩秋の古寺の、大銀杏はうつくしいと。
冬がくるまえの、曇り日の、
南天の、小さな朱い実はうつくしいと。
コムラサキの、実のむらさはうつくしいと。
過ぎてゆく季節はうつくしいと。
きれいに老いてゆく人の姿はうつくしいと。
一体、ニュースとよばれる日々の破片が
わたしたちの歴史と言うようなものだろうか。
あざやかな毎日こそ、わたしたちの価値だ。
うつくしいものをうつくしいと言おう。
幼い猫とあそぶ一刻はうつくしいと。
シュロの枝を燃やして、灰にして、撒く。
何ひとつ永遠なんてなく、いつか
すべて塵にかえるのだから、世界はうつくしいと。

井上ひさしが提唱していた「むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく、ふかいことを
おもしろく、おもしろいことをまじめに、まじめなことをゆかいに、そしてゆかいなことはあくま
でゆかいに」のせめて前半、「むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく...」をぼくもモッ
トーにしたいと思います。

いま危機に瀕している憲法を、池澤夏樹がやさしいことばで現代語訳している(『憲法なん
て知らないよ』集英社文庫)。あらためて、新訳の九条をここに引いておく。この憲法をもつ国
に生まれたことは、いまもぼくの誇りだ。

第九条

①この世界ぜんたいに正義と秩序をもとにした平和がもたらされることを心から願って、わ
れわれ日本人は、国として戦争をすることを永遠に放棄する。国の間の争いを武力による脅
しや武力攻撃によって解決することは認めない。

②この決意を実現するために、陸軍や海軍、空軍、その他の戦力を持つことはぜったいに
しない。国というものには戦争をする権利はない。

11:00

記憶の経年変化について

06 16 *2015 | 未分類

話が走りすぎているので、少し落ち着いて、いくつかの入り口からぼくが語ろうとしているものに少しずつ追っていきたい。急がば回れ、ということわざもあるし。

今回は、まず「記憶」ということについて考えてみたい。

つい先日、朝日新聞のコラム「折々のことば」で、鷲田清一は精神科医・中井久夫の興味深いことばを引いている。

「年とともに人生はクロノロジー（年代記）からパースペクティブ（遠近法）になり、最後は一枚のピクチュア（絵）になる」

続く鷲田のコメントはこうだ。

「若いころはいつ何をしたかを年代で覚えている。歳がゆくと、年代は正確に言えなくても出来事の順番はまちがえない。そして最晩年はほとんどの記憶が絵のように同じ平面に並ぶようになる。なんとも豪華なことではないか（後略）」と。

認知症の人が、一見なんの脈絡もなくぱっと子ども時代に退行したり、娘時代に戻ったりする。あるいは大変だった子育ての時代に…。そうかと思うと、不意に自分の実年齢の近くにまで戻ってきたりもする。（ぼくが接してきたのは母を含めてほとんどおばあさんなので、戻るのは“娘”時代）

上の仮説が正しいとすると、認知症の人は、時間の奥行きを失いパッチワークのようになった記憶の断片に、気軽に、等間隔でアクセスできるようになっているのだろう。もう、深い記憶の層からなにかを掘り出ししたりする必要はない。1枚の絵に、必要なものはすべてそろっている。

おもしろいので、中井の本からもう少し記憶に関するところを引いてみる。

「時は偉大な治療者である。死のうかと思つた20歳代の失恋も、60歳から振り返れば小さな哀切な思い出に変わりうる。年齢は記憶を次第に縦並びから横並びに変える」

しかし、記憶が自動消去機能を失い、心に突き刺さったまま消えなくなる（トラウマ）とどうなるか。

「サマセット・モームは『人を殺すのは記憶の重みである』といって90歳で自殺した」

さて、ぼくなり人生をいくつかの周期に区切ってみると、こんなイメージになる。

30代～60代までの30年間、自我は一定の安定期に入る。もちろん、思わぬ人生の危機に直面すると崩壊することもありうるが、とりあえずはそういえるのではないか。なぜ30代なのかというと、これも中井から教わったことだが、「30歳を過ぎると人格の解体を起こす型の統合失調症は少なくなる」という指摘からもうかがえることだ。

ちなみに精神科医の笠原嘉は絶望している若者に「とにかく30まで生きてみなさい、あなたの中で何かが変わり何かしらす生きやすくなるから」と助言するという。もう一度、中井の文章を引くと、「30を過ぎると、外的・社会的なつながりの比重が増大し、職場や社交が前景を占める」と。がしかし、その代償もある。「社会生活に必要な人の名前や肩書や誕生日の記憶の衰えの自覚もこのころに始まる」。

30代から、たかだか30年、人格というか自我は、ともかくも比較的安定期を迎えるということの傍証である。だが、60歳を過ぎると、束の間の安定が再びぐらぐらと揺らぎ始める。「老病死」という人生最大の問いが前景化するからだ。

ここからはぼくの仮説だが、中井の記憶の3段階変容論を強引に年齢に当てはめてみると、もちろん個人差はあるとして、それまでクロノロジーだった記憶が、60歳を過ぎるとパースペクティブに変わり、80歳で一枚のピクチュアに移行するのではないだろうか。

30歳以降がそのようなものだと、ではその前はどうか。ぼくの考えでは10代（細かいえば14歳から）から20代いっぱいくらいまでは、自分探しに明け暮れて、嵐の中を暗中模索で生きているような時代ではないかと思う。時に、両足で立っていられないほどの強風にも見舞われもするだろう。人は、よくこの苦難な時代を生き延びられるものだと思う。この年になって振り返ると、そこを生き延びたというだけで祝福してあげたいような気持ちになる。

さらにその前はどうか。「7歳までは神のうち」という古いことわざがあつて、調べてみると、子どもが生まれても7歳を過ぎないと人別帳（戸籍）に載せないという時代が長く続いたようだ。それだけ、乳幼児の死亡率が高かつたということだが、もう一方で、日本独自の神道的な「魂」観がそこにかがえる。（牧田茂『日本人の一生』など）

人が死ぬと魂はその人の肉体から離れるが、しばらくは亡くなった人の個性のようなものが染みついている。一定の期間(といっても何十年)を過ぎると、魂から人格性が消え浄化されて、魂のプールのようなところに移行する。またそこで何十年かを過ごし、赤ちゃんの誕生とともに新しい肉体に宿る。しかし、7歳まではなかなか魂が新しい肉体に定着しない。いつ、不意に抜け出してしまいかかわからないという、不安定な時代が7歳までということらしい。でも、これは昔のはなし。

ある日(4、5歳か)、自分を一人称代名詞で「ぼく」とか「わたし」と呼んでいる自分の存在に気づく。誰もが同じ「ぼく」とか「私」ということばで呼ぶものは、それぞれに違っているのに、それぞれにちゃんと名前があるのに、同じことばで呼んでいるものの正体はなんなのか……。ここから、「私」というものの生成・発展・消滅の全プロセス(物語)を新しい文脈で探っていきたいのだが、まあそれは追い追い……。

そもそも、その私はいつから私になったのだろうか。長田弘の美しい詩がヒントを与えてくれる。

長田弘「あのとときかもしれない」

きみはいつおとなになったんだろう。きみはいまはおとなで、子どもじゃない。子どもじゃないけれども、きみだって、もとは一人の子どもだったのだ。……そうしてきみは、きみについてのぜんぶのことを自分で決めなくちゃなくなっていくのだった。つまり、ほかの誰にも代わってもらえない一人の自分に、きみはなっていく。きみはほかの誰にもならなかった。好きだろうがきらいだろうが、きみという一人の人間にしかなれなかった。そうと知ったとき、そのときだったんだ、そのとき、きみはもう、一人の子どもじゃなくて、一人のおとなになっていたんだ。

……子どものきみは「遠く」へゆくことをゆめみた子どもだった。だが、そのときのきみはまだ、「遠く」というのが、そこまでいったら、もうひきかえせないところなんだということを知らなかった。「遠く」というのは、ゆくことはできても、もどることのできないところだ。子どものきみは、ある日ふと、もう誰からも「遠くへいってはいけないよ」と言われなくなったことに気づく。そのときだったんだ。そのとき、きみはもう、ひとり子どもじゃなくて、一人のおとなになっていたんだ。

……ふと気がつく、いつしかもう、あまり「なぜ」という言葉を口にしなくなっている。そのときだったんだ。そのとき、きみはもう、ひとり子どもじゃなくて、一人のおとなになっていたんだ。「なぜ」と元氣にかんがえるかわりに、「そうになっているんだ」という退屈なこたえで、どんな疑問もあっさり打ち消してしまうようになったとき。……そのときだったんだ。そのとき、きみはもう、一人の子どもじゃなくて、一人のおとなになっていたんだ。きみがきみの人生で、「こころが痛い」としかいえない痛みを、はじめて自分に知ったとき。

15:31

あんとシャーマン

06 13 *2015 | 未分類

きのう、新所沢のレッツシネパークで河瀬直美監督の「あん」を観た(これから観る予定の人は読まない方がいいと思う)。

5月末の公開前から、市内のいたるところにこの作品のチラシが置かれていて、そこには2館限定とはいえ「東村山市民だけの特別優待1,800円→1,100円」という割引券がついている。

「ほぼ全編、東村山が舞台」とあり、昨年の桜の季節(久米川駅南口の桜並木)から、今年の桜(最後のシーンは狭山自然公園の桜が映っていた)の季節まで1年間、この事務所の最寄駅(久米川駅)近くでロケが行われていた(と最近知った)。

土地勘のない人には、なんのこっちゃだろうけど、東村山市は30年以上住んでいる街なの

で愛着もあるし、監督が今をときめくカンヌ嬢(?)河瀬直美だしね。

河瀬直美にしてはものすごくわかりやすいストーリーだった。と思ったら、原作があった。ドリアン助川の『あん』(ポプラ社)で、舞台は愛知県新城市らしい。原作は読んでないので、元本のレビューで知った。

もう樹木希林の演技がすばらしい。それに尽きる。樹木演じるハンセン病の患者・徳江さんという人がほんとうにいて、今年の桜を見ることなく亡くなった。多磨全生園からバスで久米川駅まで、あとは徒歩でどら焼き屋に通っていた。その情景がいろいろと目に浮かんできた。映画に出てくる場面を見慣れているからそう感じるのだろうか。それもあるだろう。しかしそれよりも、樹木希林をそこまで憑依させたのは監督の力だろうね。それくらい実在感のあるいい演技だった。

ハンセン病についても、世間の偏見や差別、家族からは縁を切られ、結婚もできず、一生療養所の外に出られない人びとの苦しみや悲しみを、告発調ではなく、静かに見つめている。これは、原作がそうなっているのだろうか...。亡くなると、墓の代わりに(墓をつくれなくて)仲間たちで好きだった樹を植えることにしているという件(くだり)は、なんともやりきれなかった。

チラシに書かれているコピー「私達はこの世を見るために、聞くために、生まれてきた。...だとすれば、何かになれなくても、私達には生きる意味があるのよ」は、徳江さんが亡くなる前に店長さん(永瀬正敏)に向けて発した言葉だが、ここにこの映画を貫くメッセージのすべてが込められている。

この映画には主要な登場人物が3人しかいない。徳江さんと、どこか暗い過去をもつ店長、母子家庭の中学生・内田伽羅(樹木の実の孫娘)だ(出番は少ないがもうひとり、市原悦子もよかった!)。

三人が三様に抱え込んでいる生き難さや孤独は、自分たちが勝手に作り出している牢獄なのかもしれない。咲き誇る桜の美しさに、冴えわたる月の神々しさに、思わず見とれて放心している自分がある。ちゃんと見ようとするれば、この大自然は、いつだって安らぎと愛を惜しみなく降り注いでくれているのではないか...というのが、ぼくが河瀬直美の映画から受け取るメッセージなんだけど。

とはいえ、カンヌでグランプリをとった「殯(もがり)の森」(2007年)は、いただけなかった。セリフは聞き取りにくい(ここには監督の意図があるわけだけど)、舞台になった山村のグループホーム、若年性認知症の利用者らしいだしげきの演技も、リアリティを感じなかった。

同じくカンヌで、史上最年少で新人監督賞を受賞した「萌の朱雀」が、最初に観た河瀬作品。なんとも言い難い不思議な余韻の残る映画だったので、前評判も高かった「殯(もがり)の森」を見たわけだけど、後半、延々と夜通し森をさまよう場面なんて、ほとんどたいくつだった記憶がある(どちらも尾野真千子主演)。

そういいながら、去年公開された「2つ目の窓」も観てしまった。大好きな奄美大島が舞台だったからだ。16歳の少年少女の恋と成長はそれなりに見どころもあるが、少女・杏子の母イサを演じた松田美由紀がよかった。イサはユタ神様だが、難病に侵されて死が迫っている。病院を出て自宅に戻ったイサは、ひろく開け放たれた部屋から見えるガジュマルの林に向かって静かに祈る。夫の杉本哲太が「俺らには見えへんものが、見えてるんじゃないの」と娘・杏子にいうシーンがある。

臨終の場面、村の人たちが三々五々と集まってきて、三線(さんしん)を奏で島唄をうたう。太古の昔から届いてくるような人々の歌声、温暖な気候とやさしく吹きわたる風、自然の呼吸と一体化していたイサの呼吸が止まる。松田美由紀ってこんなに芝居が上手かったっけ、と思うようないい場面だった。こんなふうには死ねたらいいな。

この映画には、生と死の循環をめぐるいくつもの子ネタが仕込んであるのだが、それを読み解くことはこの文の主旨ではない。実は、この映画の話を引きいたのは、これから考えてみたいテーマがそこにあつたからだ。

突然、転調して予告編。奄美大島の施設の職員さんからずいぶん以前に聞いた話である。かつてユタだった婆さんが、ぼけて施設に何人か入所している。彼女たちが、わけのわからない言葉を発する。でも、それをぼけによる妄言と考えればいいのか、自分たちには聞こえない神からのお告げを聞いているのか、それを判別するのが難しい、と。

おもしろい話だと思った。なぜなら、ぼけによる妄言と神からのお告げはひとつのものではないかと思えたからだ。その話を聞いてから、そのことが頭から離れなくなった。これからやってみたいのは、元ユタであったかどうかに関わりなく、認知症の人の一見意味不明な言動を、「次なる世界」とのチャネリングとして解釈してみたいということだ。

でも「認知症シャーマン説」、介護職のみなさんからはひんしゆくを買うだろうなあ。

09:50

終わりに見た街

06 11 *2015 | 未分類

7日(日)は、第2回「介護レクに紙芝居大会」(雲母書房主催)が科学技術館という東京のど真ん中の会場で開催された。三好春樹、遠山昭雄とぼくが呼びかけ人になっていて、ぼくは第一会場の司会を仰せつかったので、風邪気味でのどが痛かったが、代役をお願いするのみなあとと思って駆けつけた。終わってから、二次会までなんとかお付き合いし帰宅すると、熱発していた。

今回はのどが腫れてほとんど声が出せなくなった。ここまでのかすれ声は初めて。なるほどケア塾のセミナーについて電話でお問い合わせをいただいた方には、本当に申し訳ないことでした。なにを言ってるか、ほとんど聞き取れなかったと思います。3日間、ぐたぐたして、今日から仕事復帰してます。

この大会はとて内容のある会だったので、まだホットなうちにレポートしたいのだが、その前に書きたいことがあるのでこちらは後回しにしたい。

前のブログに、なかにし礼の詩を引用した。なんと大げさな、と思われたらどうか。いまにも戦争が始まりそうな、ファナティックで自己陶酔的な物言いを感じたらどうか。

今回、取り上げたいのは山田太一著『終わりに見た街』という小説だ。もう34年も前に書かれた小説で、翌1982年にテレビドラマ化、10年前にも「終戦60年特別企画」としてリメイクされ放映された(中井貴一主演)。以前は中公文庫で出ていしばらく品切れだったが、一昨年、小学館文庫として化粧直しして出版されている。

川崎市に住むサラリーマン一家(主人公の清水要治、妻・紀子、中2の姉・信子、小5の弟・稔)と、数日前に再会したばかりの要治の幼馴染みの宮島敏夫、高1だが不登校の息子新也の6人が、突然、昭和19年の日本にタイムスリップしてしまう話である。

作者・山田太一は東京生まれで、11歳で終戦を迎えたはずだから、本当に日本が勝つと信じて疑わなかった戦時下の日常を肌で知っているはずだ。かつてそこにあった集団的狂気を、誇張を交えず淡々と、リアルに描き出している。

突然タイムスリップしたとはいえ、親たちにとっては、そこは子ども時代に体験した既知の世界でもある。もちろん、いまは子どもではなく中年に差し掛かった大人としてこの事態に対処していかなければならないのだが、激しい飢えをしのぎつつ、なんとか知恵を働かせて生き延びていく...と、そうは問屋が卸さないところがこの小説家の持ち味なので、興味ある方はストーリーをぜひ読んでください。

問題は、飽食の時代しか知らない3人の子どもたちが、その時代をどう受けとめ生き延びようとするのか、だ。実はそれがこのドラマの大きなテーマである。クライマックス近く、しばらく行方不明になっていた新也が国防服に身を包んで戻ってくる。痩せて頬がこけてはいるが、その眼には見違えるほどの力をたたえて。

自分から工場長にかけあって、飛行機の翼をつくる仕事をしているという。昭和19年にワーブしてからも、清水家の人びと(もちろん父親とも)、ほとんど言葉を交わさなかった新也が、いまは言葉づかいも凛としていて、かつて不登校児だったという面影はかけらもなくなっている。

「みんな御国のために死ぬ気で働いています。誰ひとり、日本が負けるなんて思っていません。学校の成績が悪いからといって、クズみたい(という奴は一人もいません。(中略)工場じゃ、本当に力のあるもんが認められているし、ヒョロヒョロして理屈をいうような奴はぶん殴

られています」

しばらく、このあとのやりとりを引いてみる。

新也「お父さんたちは、まだつまらないことをいっているそうですね。国が亡びるかどうかというときに、真剣に戦わない人間なんて、親でもぼくは許しませんよ」

敏夫「しかし、戦争はけっきょく負けるんだし」

新也「結果は問題じゃありませんよ。問題は日本人が心一つにして戦っているときに、こんな戦争なんてとって、背を向けている人間がいていいかどうかということです」

しばらく、要治を交えて、国を守るために死んでいく人間を笑えるのかという言い合いが続く。茶の間に聞いていた中2の信子も会話に加わる。

信子「私もたまらないわ。米国とみんな一生懸命に戦っているのよ。それをどんなわけがあったって、馬鹿にしたように見るなんて、たまらないわ」

要治「馬鹿にしてはいない」

信子「だったら、真剣に工場に行ったらいいじゃない。米軍は、どんどん日本人を殺してるのよ。無差別に爆弾を落として、赤ん坊だろうと、年寄りだろうと、どんどん殺してるのよ」

妻の紀子が遮ろうとするが、続けて.....

信子「稔だっていってるわ。うちへとじこめて、戦争の悪口ばかり聞かせて——こんなつまらないっていってるわ。集団疎開でもなんでもいって、立派に、みんなと同じに義務を果たしたいといってるわ」

新也「日本人を殺してる敵を、憎いとは思わないんですか。いったいどういう神経をしているんだ。工場休んで、ふらふらほつき歩いて」

あと数か月後に日本が負けるという歴史を知っているはずの子どもたちが、知識より強烈ななにかに支配されていく。感性や思考の純粹さゆえに、架空の昭和19年を(いま)として生き始めてしまうのだ。この子どもたちの反乱を、どう受けとめればよいのか。この子どもたちに対抗できる言葉はあるのか。

なんど読んでも戦慄を覚える場面だ。

戦争は、独裁者によって強権的にもたらされるのではない。ばらばらに分断されている庶民が、〈敵〉を発見することで、ひとつにまとまるとまり、そこに奇妙な高揚感がつくり出される。虚構でしかない(国)という幻想が、たくさんの同胞の死という遺恨をバネに極大化する。それは、異臭を放ちながらやってくるのではない。時に香ばしく甘美な幻想を伴ってやってくるのだろう。

18:19

アジアは悲しいか・続き

06 06 *2015 | 未分類

悲しき東アジアについて書き始めたときには、もっと政治性の強いことを書こうと思っていたのに、想定外のラフコースに入ってしまった。途中から、能天気でもいいから希望のようなことを書いてみたいと思ったわけで...。それほど、とくに3・11以降のこの国の政治状況には心底、絶望している。

この円窓社HPの設計者白濱くんは、彼のHPIにこういう文章を書きつけている。

「3・11以後の世界と3・11以前の世界とは物事の在り方がガラッと変わってしまったと思います。政治的などの表面的なことだけでなく、普通の生活の日常性のなかに彼岸性が侵入してきて、いつもどこかしこに、その無常性が漂っているような気がします」

そうか、政治状況だけじゃない、日常性が浸食されはじめているんだ。ぼくはあの日以降、地上から数センチ身体が浮いてしまって、未だに着地できていないような居心地の悪い感覚がずっと続いたままだ。

ブログの最初の文章に、還暦のときにはまだ高齢者になった実感がなかったと書いた。本当は、実感する余裕もなかったと言い変えたい。ぼくが還暦を迎えたのは3・11の1週間後。原発がこれからどうなるのか、まだまったく予断を許さない状況だった。腰が抜け呆けたよう

になり、5月の連休が明けのくらいまで、ただ茫然と日々をやりすごしていた。何事にも集中できず、なにより本がまったく読めなかった。活字を目で追っても、なにも頭に入ってこなかった。こんなことは、生まれて初めてだった。ここで自分になにが起こっていたのか、このこともこれからフィールドワークしてみたい。

選暦とは、暦が元に戻ることで、ゼロにリセットされることだ。とすれば、3・11にぼくの選暦が重なり、再び生まれ直したぼくは、「3・11以後」という人生を新しく生き始めたということになる。いま4歳と3カ月。

2014年7月1日、政府は集団的自衛権の行使を容認する閣議決定を行った。おそらく後世の同胞が、日本が再び戦争へと大きく舵を切った重大な転換点として、長く記憶にとどめることになるはずの1日。

7月10日の毎日新聞・夕刊の「特集ワイド」に載ったなかにし礼の詩を紹介しておきたい。若者たちだけでなく、いまそ同胞のみんなに深く味わってもらいたいと思い、無断掲載する。1字空いているところは、作者には失礼ながら改行を詰めたところだ。

詩「平和の申し子たちへ！」泣きながら抵抗を始めよう

なかにし礼

2014年7月1日火曜日 集団的自衛権が閣議決定された

この日 日本の誇るべき たった1つの宝物

平和憲法は粉碎された

つまり君たち若者もまた 圧殺されたのである

こんな憲法違反にたいして 最高裁はなんの文句も言わない

かくして君たちの日本は その長い歴史の中の

どんな時代よりも禍々しい 暗黒時代へともどっていく

そしてまたあの 醜悪と愚劣 残酷と恐怖の

戦争が始まるだろう

ああ、若き友たちよ！ 巨大な歯車がひとたびぐらっと

回りはじめたら最後 君もその中に巻き込まれる

いやがおうでも巻き込まれる

しかし君に戦う理由などあるのか

国のため？ 大義のため？ そんなもののために

君は銃で人を狙えるのか

君は銃剣で人を刺せるのか

君は人々の上に爆弾を落とせるのか

若き友たちよ！ 君は戦場に行ってはならない

なぜなら君は戦争にむいてないからだ

世界史上類例のない 69年間も平和がつづいた

理想の国に生まれたんだもの

平和しか知らないんだ 平和の申し子なんだ

平和こそが君の故郷であり 生活であり存在理由なんだ

平和ぼけ？ なんとでも言わしておけ

戦争なんか真つ平ごめんだ 人殺しどころか喧嘩もしたくない たとえ国家といえども 俺の人生にかまわないでくれ

俺は臆病なんだ 俺は弱虫なんだ

卑怯者？ そうかもしれない

しかし俺は平和が好きなんだ それのどこが悪い？

弱くあることも 勇気のいることなんだぜ

そう言って胸をはれば なにか清々しい風が吹くじゃないか

怖れるものはなにもない 愛する平和の申し子たちよ

この世に生まれ出た時 君は命の歓喜の産声をあげた

君の命よりも大切なものはない

生き抜かなければならない 死んではならない

が 殺してもいけない

だから今こそ！ もっともか弱きものとして
産声をあげる赤児のように 泣きながら抵抗を始めよう
泣きながら抵抗をしつづけるのだ
泣くことを一生やめてはならない 平和のために！

15:25

アジアは悲しいか

06 05 *2015 | 未分類

三好さんがFacebookでこのブログを紹介してくれたと書いた。その告知の下に、「私が唯一支持する政党『悲しき東アジア』が新しい原稿をアップ」と書かれている。さっそく検索すると「情況への発言」というタイトルのコラムに「東アジアの国家主義の現在」という新稿がアップされていた。悲しき東アジアってなに？

HPには「『悲しき東アジア』は、しばらくはネット上だけに存在する政治党派です。私たちの思想的、政治的立場を表明し、その根拠を明らかにし、さらに、具体的政治活動の提案をしていきます。ただ、従来の政党のような『綱領』のようなものはなく、政治的方向性を提案し、時代の中で共感者とともに深化させていく、流動的な党派です」とある。

日中韓に北朝鮮を加えた東アジア4か国が、それぞれに稀に見るいびつな国家をいただき、歴史認識も共有できずにいまのような相互不信を深めていけば、その先に待ち受けている最悪のシナリオは、軍事的な衝突である。悲しさは、そこからもたらされるのだ。

この党派の目指すものは、鳩山由紀夫の「東アジア共同体」という構想とはだいぶ方向が異なるようだ。いまの国家形態を維持したまま(北朝鮮はそうはいくまいが)、緊密な経済協力をベースに東アジアの安全保障の枠組みづくりを模索し、最終的には通貨統合まで行こうというのが鳩山構想。このアジェンダは、いまはだれも相手にしなくなったようだけど…。一方、悲しき東アジアは、国家という枠組みを解体していこうという射程と戦略をもっているようだ。

ぼくは9年前、友人たちとレンタカーでイタリア→フランス→スイスと旅をしたとき、国境を超えるのに検問がないことにたいそう驚いた経験がある。それまでのぼくの常識では、ある国からの出国と次の国への入国はパスポートに記載され、国が変われば通貨も変わるというもの。スイスは国境をまたぐとき、運転手だけパスポートの提示を求められ、EUに非加盟だから通貨もユーロは使えなかったけど、それでもその程度のゆるさだった。

そのときから、いつかアジアもこうなればいいなと考えるようになった。パスポートをチェックされずに国を移動でき、通貨も統一される。そんな日は来ないないものか、と。

そのあと、アジアハイウェイというプロジェクトの存在を知った。

ルート1は、もちろん既存の高速道路はルートに組み込むのだが、東京が起点で南西に向かう。九州には入らず下関から釜山へ。韓国を北上し黄海側に出て北朝鮮を抜けて中国に。瀋陽から南西に向かい北京へ(ここはまだ高速道路が未完成)。北京からは香港までまっすぐに南下、ベトナムに入ってから海岸線を南下を続け、ホチミンで西に向かう。カンボジア、タイ、ミャンマー、バングラデシュを通過してインドに入る。そのあと、トルコから欧州自動車道に接続してヨーロッパへと続いていく。

この計画を知ってから、できれば生きているうちに、自分の車でインドのコルカタ(旧称:カルカッタ)まで行ってみたいという夢が生まれた。逆に言えば、どうい問題がクリアされればそれが実現可能となるのか、そっちの方向から考え始めたのだ。

まず最初の関門は、下関と釜山をつなぐ海底トンネルだ。距離は200キロ弱ある。青森・函館間が54キロだから、その4倍近くもある(ちなみにドーバー海峡はわずか34キロ)。対馬までの3分の2を日本が、対馬・釜山を韓国にお願いできないか。

すでに道路はつながっているけど、板門店から先の北朝鮮国内は通行できない。民主化して、国交を結ぶまでに、どのくらいの時間がかかるか。中国だって、一筋縄ではいかない。尖

閣で衝突が起これば、国交断絶なんてことになりかねない。ベトナムから先だって、どうなることか。

...と考えると絶望的な気持ちになるけど、可能性はゼロではない。その方向で、つまりEUのアジア版が実現する日を、ってことはアジアからもめごとが消える日を、これからも根気よく夢見つけていきたいと思っている。

長くなったけど、最後にどうしても言っておからなければならないことがある。インド国内での運転は計算に入れていない。インドのドライバーは世界一のテクニックと勇気がある。数センチの隙間でも、そこに車を突っ込んでいく。渋滞すると、信号も車線もなんのその、通行人、人力車、オートリキシャ、自動車、物乞いが殺到し、隙間を埋める。さらに、牛やラクダまでそこに参加してくる。

できれば、インドではコルカタに住む友人宅のすぐそばに高速道路の出口をつくってもらいたい。そう祈るばかりだ。

19:06

[newer](#)[older](#)page [1](#) [2](#) [3](#) [4](#)[HOME](#) [RESET](#) [△](#)